

Cursed Lily

あれは、いつのことだっただろう。

手の中のグリーンシールドを、ほんのわずかに力を込めて握りしめながら、ほむらは朱色に染まる薄暮の空を見上げた。

ついこの前のことのような気もするし、はるか遠い昔のことのような気もする。

いったい何度、同じことを繰り返してきたのか、もう当のほむらにすらわからないほどの無限の時間の流れの中に埋もれた記憶。

「ロ、ミナ」

無意識のうちに口について出たその名前に、ほむらが眉根を寄せる。

もう心を揺らすことはない、そう決めた筈なのに、まだ心のどこかに迷いがあるのかと、ほむらはきつく唇を噛んで首を振った。

感傷に浸っている時間はない。

いや、逆か、とほむらは左手の盾を見た。

時間はある。

この世に存在する全ての生物が、みなそれぞれに限られた時間の枠にはめられて生きている中で、ただ一人、曉美ほむらだけが、その枠を外れて、恐らくは永遠とも言える

だけの時を手に行っている。

ただ、それはほむらにとつてなら安らぎをもたらすものではなく。

むしろ、永久に抜けることの出来ない円環の迷宮に入り込んでしまったような、少しでも気を抜けば自我が崩壊してしまいかねないような焦燥感に苛まされながら、それでもなお、何処にあるのかもわからない出口を探してほむらは必死にもがいていた。

そう、残された時間は、やはり少ない。

ワルプルギスの夜の出現まで、あと十数日も無いだろう。やらなければならぬことはたくさんある。

彼女との約束を果たすために。

もう一度、ほむらは空を見上げた。

既に日は落ち、暗く濁った紺色の天球に星の光が微かに滲んでいる。

彼女には似合わないな、とほむらは思った。

あの子には、鹿目まどかには、吸い込まれそうなほどに遠く澄み切った、真つ青な空がよく似合う。

——ほむらちゃん

そう、少し照れくさそうに笑いながら自分の名前を呼んでくれるまどかの姿が脳裏に浮かぶ。

その笑顔を心に刻んで、ほむらはゆつくりと歩き出した。迷いはない。絶対に迷わない。

何度も何度も自身に言い聞かせながら、ほむらは歩みを進めていく。

手のひらに食い込むほどに強く、ほむらはグリーフシールドを握りしめた。

それは魔女の卵と言われる、黒い宝石。

その持ち主を、ほむらはつい数時間前、自らの手で消し去っていた。

シャルロツテ——巴マミの命を奪った、魔女を。

「ああもう、きりがいいわね」

薄暗い、ドーム上の屋根に覆われた通路を駆け抜けながら、マスケットで魔女の使い魔を次々に撃ち落としていく。いったい何匹の手下を倒したのか、マミはとつくに数えるのをあきらめていた。

マスケットは、何丁であろうと取り出せる。

ただ、それはマミの魔力が続く限りにおいて、という条件の下で、だ。

「また、別れ道……！」

魔女本体を探して、マミは既に一時間以上、延々とただ暗いだけの空間を走り続けていた。

脳に直接響くような使い魔達の甲高い笑い声が、マミの苛立ちをつのらせる。

体力はまだ充分にある。

だが、精神力となるとそうはいかなかった。

どこからともなく、それこそ無限とも思えるほどに次々と襲ってくる使い魔を蹴散らしながら、どこにあるのかもわからない目的地を目指して、たつた一人で突き進む。

それは、魔法少女として幾度となく魔女との戦闘を経験してきたマミであっても、未だに慣れることのできない、恐怖との闘いだっただけ。

「情けないな」

目を閉じて、自身の頬を手のひらで軽く叩く。

過去には、もっと長時間、それこそ半日近くにわたって魔女を探し続けたこともあったし、それこそ空間を埋め尽くすほどのまるでイナゴの群れのような大量の使い魔に襲われたこともある。

それに比べれば、この程度はまだ緩いほうだ。

なのに、何故こんなにも自分の膝は震えているんだろう。額に冷や汗が浮かぶのが止まらないんだろう。

いつもそうだった。

あせるな、落ち着いて、冷静に。

そう常に自分に言い聞かせ続けていなければ、一步も前に進むことが出来なくなりそう。

必死に心を奮い立たせて、やつとの思いで魔女を倒し、暗く濁ったソウルジェムに清浄な輝きを取り戻す。

だが、その安穩もせいぜい数日で、またどこからともな

く使い魔や魔女が現われては街の人々を喰らう。

そしてまたそれを倒し……そうやって、もう数年もの月日が経過していた。

「しっ、こいつ！」

前後左右から一斉に襲いかかってきた使い魔を身体をひねりながら撃ち落として立ち上がる。

魔女はどこににいるのか。

進んでも進んでも、同じような通路と分かれ道の繰り返しに、マミは自分でもはつきりとわかるほどに焦っていた。

落ち着け、落ち着け、落ち着け——

焦りは不注意を産む。不注意は隙に繋がる。

ほんのわずかな隙が、まさに文字通りの命取りになりかねない。

「そこっ！」

正面と後ろから挟み撃ちのようにして襲いかかってきた使い魔を両手のマスキットで同時に撃ち落とす。

続いて左右。

今度は前と右。

また左右。

後ろと右。

左。

前と、左右。

上。

「うえ……？」

マミが見上げる。

前後左右、その四方に意識を集中していて、マミの反応が一瞬遅れた。

ドーム上の屋根をすり抜けるように、数匹の使い魔が、頭上からマミに襲いかかっていた。

慌ててマスキットを取り出すが、間に合わない。

驚喜の笑い声が、マミの脳に響きわたる。

やられ、る？

いやだ。

いや、だ……！

「伏せて」

その時だった。

こんな命がけの場には似つかわしくないと考えるほどに静かな声が、マミの耳にはつきりと聞こえた。

と同時に、背後から何者かに体当たりを受けて、

「きゃっ！」

マミが地面に倒れ伏したその上で、小さな爆発音が数度、まるで花火でも連続して打ち上げたかのように響きわたった。

「な、なに……」

マミが顔を上げる。

その目前に、一人の少女が立っていた。